

彼女の場合

鹿島田浩二

彼女が最近つきあい始めたボーイフレンドのK君には「オリエンテーリング」という趣味がある。都内で何年もOLを勤めていた彼女には馴染みのないスポーツだ。彼はどうやら相当の熱意でこの競技に入れ込んでいるらしい。彼女は若い女性には珍しく登山に興味があり、数え切れないほど山に登ってきたが、今まで地図とコンパスなんて一度も使ったことなかった。だけど自然に包まれる心地よさを知っていた彼女は、少し興味がわいてK君に一度オリエンテーリングを見てみたいと言った。

K君はなぜか一瞬困惑したような顔をみせて、はじめは曖昧な返事をした。けれど彼女の強い願いに押されて、「あまり見ても面白いスポーツじゃないよ」と念を押した上で半分あきらめたように承諾した。

それから2週間後の夏の盛り、彼が約束の場所に指定したのは愛知県の山間部にあるローカル線の駅。そこから車で1時間、うねるような山道を登って、地図に名前がやっと小さく出ている山間の村に到着した。驚いたことに、そこでは芝生の広場に大勢の人が集まってお祭り騒ぎになっていた。色とりどりの服を着た人々が山の中からぼつぼつ現れては、次の人にタッチして山に消えて行く。皆それぞれに真剣に走り、滝のように汗をかい、身体は木々の枝や草泥にまみれている。

テレビでも雑誌でも見たことない初めての光景だったが、彼女を一番驚かせたのは選手の着ている服である。専用のユニフォームなのだろうか。競馬のジョッキーのように派手な柄でだぶだぶした服。抽象絵画のような幾何模様、仮面ライダーのような奇妙な柄、穴があいてぼろぼろの選手もいる。あの服は「トリム」と呼ばれる専用スーツで、オリエンテーリングをやる時は皆あれを着るのだ、とK君のクラブの女性が教えてくれた。まるで仮装しているかのようなトリムを着た選手は、皆一生懸命なだけ、彼女にはどこか滑稽に映った。そして、まさか自分が将来、あの「トリム」を着ることになるとはその時は予想もしなかった。

4年後、彼女は、週末に夫のK君を留守番において一人で大会に参加する熱心なオリエンティアになった。「君がオリエンテーリングにはまるとは思わなかったよ。」K君はトリムが一般の人には奇異に映ることを良く知っていたので、おしなやかに余念のない彼女には馴染まないと考えたようだ。「まだやばいかな、と思ったんだ。見せるのは、まだ付き合いが浅い頃だったろ。」確かに彼女も、はじめはトリムが異様に写った。もしK君がいなかったら、トリムに袖を通し、オリエンテーリングを初めることはなかっただろう。事実彼女が誘った友人は、その点に馴染むことができず去っていった。

しかし彼女の場合、彼に連れられて続けるうちに、森の中でフラッグを見つけるこの競技の面白さが分かり始めた。その魅力はやがてトリムへの抵抗感より大きくなった。今は正直なところ「トリム」にも慣れてきた。海外の華麗なエリート選手を見ていてと着こなし次第ではかっこ良くもなる。最近流行の体にフィットした0ウエアの方が彼女の好みである。

しかしそんな彼女も未だに抵抗感を強く感じる時がある。パーク0会場に行く時だ。公園は家族連れやカップルなど多くの人が訪れるくつろぎの場。なのにぼろぼろのトリムや派手なタイツを履いた参加者がうろろしていると異様な空間になる。会場に向かうときそんな参加者が遠目に入ると、そのまま素通りして帰りたくなってしまったのだ。

「山の中でやるオリエンテーリングは、確かに多少奇抜な格好でもいいけど、会うのは森の小鳥たちくらいでしょ。でも公園はもっとTPOが必要よ。なぜ綺麗な芝生と庭園の中を走るのに、穴の開いたトリムを着なければいけないの？もっと素敵なウエアを着た方が自分も周りの人もハッピーよ。あれではせっかくオリエンテーリングに興味を持つかもしれない人も、見ただけで引いてしまうわ。」

彼女の言葉にK君は一瞬考え込んだ。



筆者：鹿島田浩二（渋谷で走る会を主宰）

「そうだね。スポーツは格好でやるものではないし、でもより多くの人にスポーツの愉しさを理解してもらうためには、ウエアは大切なツールだね。少なくとも人に不快感を与えないマナーは必要かもしれない。」K君は6ヶ月の娘をあやししながら答えた。

彼女のように幸運にも「トリムの壁」を乗り越えることができなかつたら……。K君のように大好きなオリエンテーリングを紹介するのを躊躇ってしまったら……。

オリエンティアは、外見や服装にこだわりのタイプの人はいない、それがあつた種の居心地の良さを生み出しているのも事実だ。僕たちのスポーツの未来を考えると、社会の中でより広く受け入れられて行くためには、内輪でしか受け入れられないウエアは障害でしかない。たかがウエア、されどウエアである。「一般に受け入れられやすいウエア」、一歩進んで「魅力的なウエア」について皆で考えていく必要があるのではないかと。

(鹿島田浩二)